



イブたちかく語りき

飯干恵子

きりぎりす

江苏工业学院图书馆
飯藏惠子章



イヴたち かく語りき



飯干恵子

1991年5月7日 初版発行

発行者／角川春樹

発行所／株式会社角川書店

東京都千代田区富士見2-13 〒102 振替 東京3-195208

TEL 営業03-3817-8521 編集03-3817-8451

印刷所／大日本印刷株式会社

製本所／株式会社宮田製本所

落丁・乱丁本はお取替いたします

ISBN4-04-872633-1 C0093

イブたちかく語りき

目次

夕焼けの眠る庭——5

雨の中の5センチ——45

緑のタペストリー——91

ブルーフィッシュ——131

イヴたち かく語りき

175

ママ、アイ・ウオント・トウ・
トーク・トウ・ユー——

219

あとがき

264



装丁／宮川隆
カバー・本文イラスト／飯野和好

夕焼けの眠る庭



猫が死んだ。

弟と一緒に、おかかのおにぎり二コを添えて庭の金木犀きんもぎせいの木の根元に彼女を埋めた。

土をかける錆びかけたスコップ。それを持つ手がとても遠くに、他人の手のように見え
た。

継子つぎこも弟も何も喋しゃべらなかった。

流れる汗も拭ぬぐわずに黙々と土をかける。セミの声とスコップの音が鼓膜にたよりなく幾
重にも貼はりつく。

埋葬が終ると、弟は胸のポケットから煙草たばこを取り出して火をつけた。そしてうつむきか
げんに煙を吐くと、サンダルをぬいで縁側の暗がりにスローモーションのようにゆつくり
と消えていった。

継子は縁側に坐^{すわ}って彼女のいる場所を眺めた。庭の片隅に濃い影のように、そこだけが浮きあがっていた。

今年一番の暑さになりそうな午後だった。

彼に知らせてあげなくては。

家の奥から水の音が聞こえた。弟が手を洗っているのだろう。継子は夏の陽^ひに照らされた自分の手の爪^{つま}に黒い土がつまっているのを見つけた。そして長い溜息^{なげいき}をつくように、ひっそりと泣いた。

いつまでもだらだらと寝てるんじゃないやありませんっ。

日がな一日ベッドから出ない娘に母はよく叱^{しか}った。あれはいつ頃^{ころ}からだろう、一一の頃からか。わたしは失語症になった。ある日、コミュニケーションにとつての言葉というものの欺瞞^{ぎまん}に気づいてしまったのだ。何がきっかけかは、今となつてはもう思い出すことはできない。言葉は時として凶器になりうる、それを知ったからだろうか。しかもその凶器にはたいして意味などないのである。無意識に投げられるナイフ。それをかわす術^{すべ}をもたない者は、自分の身体^{からだ}でそれを受けとめるしかない。

傷口から吹きだす血を手でおさえながら必死に助けを求めても、責任能力のない通り魔犯を誰だれも有罪とは言えないのだ。

しかし、本当に苦しいのは自分が被害者だからなのではない。自分もまた、誰かに向かつて無意識にナイフを投げ続けているからなのだ。他人に向かつて投げた言葉が返って来る頃には先の尖とがった凶器になり自分を傷つける、その恐怖にわたしは言葉を失った。残ったのは記号としての言葉だけだった。

言葉をもたないわたしは生きる場所をほかに見つけなければならなかった。

幼いわたしにとって、ベッドの中だけが自分の生きてゆけるもうひとつの世界へと繋つながっている唯一の場所だった。

現実でうまくいかない事があると、いつもわたしは、もうひとつの世界で、それをやりなおす。現実の生活では、たいした意味のない存在のわたしでも、異次元への扉さえ開けてしまえば物語の主人公になれた。

しかし、ヒマさえあればベッドにばかりいるわたしに、母親がイライラし始めた頃、わたしは別の方法で、繋がることを考えなければいけなくなつた。

別の世界に生きてることを知られてはならない。

継子は手を洗っていた。

短く切った爪の間に入りこんだ土はなかなかとれない。あきらめてタオルで拭く。右の中指には、まだ少し黒い土が残っていた。

継子は部屋にもどると、机に坐り、ひきだしから絵ハガキを取り出す。南の島から送られたそのハガキには彼の懐しい字で、元気です、と書かれていた。

彼は、わたしが別の世界で生きていることに気づいた最初で最後の人だった。

「古沢^{ふるさわ}ってマネキンみたいだ」

学食でコーヒーを飲んでいる時だった。

「マネキン？」

「そう、マネキンみたいにバス停で立つてる」

継子は声の主を見上げた。

背が高いのにとっても瘦^やせている男だった。時計のバンドを一番内側でとめているその手首は、わたしとそれほど変わらないように見えた。

もともとは同じゼミにいる友達の高校時代の同級生とかで一度紹介されただけだった。

なのに二度目に会ったとたん、古沢、なんて呼び捨てにする馴れ馴れしさに、ムツとした。

「言ってる意味がよくわからないわ」

わたしはわざと、めんどくさそうな声をだした。

んー、どう言えばいいのかなあ、こっちの気持ちに気づかずに彼は話を続ける。

「古沢の場合、なんか違うんだよ、雰囲気が」

ああ、あっちの世界にいた時だ。

「わたし、ボーッとしてるから」

これは自分の秘密を守るための常套句だ。

「ごめんなさい、声掛けてくれたのに、わたししたら気づかなかったのかしら」

こう答えておけば皆一応は納得する。その後で、あいつはお高くとまってる、とかボンヤリした奴だとか、何と言われても別にかまわない。とにかく、ボーッとした女の子、というのでおし通すのが一番安全だということをわたしは長年の経験でよく知っていた。

「いや、ボーッとするってんでもないんだよな、うーん、あれはやっぱマネキンになつてたかしこ言いやうがない」

彼はちつとも納得していないようだった。

「俺も同じバス使ってるんだ。実は昔から古沢のこと知ってたんだ。名前は知らなかったけど、いつ見てもバス停で身じろぎもせず立っているヘンな奴がいるなあって、ほんとうにピクリとも動かないんだ」

これは、ひょっとして単に口説こうとしているだけかもしれない、わたしは身体中を警戒心でいっぱいにする。大人になると、めんどろなことが増えて困る。

「そう？ わたしのボンヤリは有名だから」
はやく消えてくれないかな。

「マネキンみたいって言われたことない？」

「ない」

しつこい。

「そうか」

「別に、わたしがブーツとしても誰にも迷惑はかけてないと思うわ」
そこで運よくチャイムが鳴った。

「じゃ、わたし午後いちの講義にでるから」

わたしは席を立った。

「立ったまま、どっかにいつてると危いぞ」

彼がぼそり、と言った。

えっ?!

わたしは、聞こえなかったふりをして歩き出すのが精一杯だった。背中に彼の視線を感じたような気がしたけど、振りかえる勇氣はなかった。

電車の中でも授業中でも、バスを待つてちよつとした間でも、その頃のわたしは自由に向かうの世界への扉を開けることができた。例えば何でもいい、石ころとかタイルとか、ゴミでもいいのだ、足元にあるちいさい何かをじつと見凝める。そしてゆつくりとフォークスをずらして、その対象物への実感がなくなるちよつとした瞬間に、向かうの世界にすり、と入りこめばいい。実に簡単だ。

だけどそうしている間、自分が外からどう見えてるか、なんて考えたこともなかった。マネキン。

馴れ馴れしい彼のことは好きになれなかったけれど、その表現は少しだけ気に入った。

その日から、彼はわたしを見つけるとすぐに寄つて来ては喋りかけるようになった。わたしはそれが嫌だったので、彼の姿を少しでも発見すると逃げるように隠れた。しかしさすがに扉の向こう側にいる時は、周囲に注意がいかない。結果、そういう時に限つて後ろから背中を叩かれるハメになった。

「マネキン」

わたしは急激に現実に取りもどされる。

「マネキンはもどりが遅い」

彼は笑った。

わたしは絶対に笑えない。まず自分がどこにいるのかを確認することから始めなくちゃいけないからだ。日なたに長時間いると、日陰に入つたとたん、光度が急に変わるので何も見えなくなる、それと同じ状態になるからだ。

ゆつくりと目をならす。

バス停。

彼がにこにこ立っている。